

---

# だから、待ってるから

桐原草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だから、待ってるから

### 【Nコード】

N1840BA

### 【作者名】

桐原草

### 【あらすじ】

研究室に泊まり込みもう三日目。明日からの週末はツーリングに行くんだ。課題もあらかた終わった。

「艦長、カップラーメンの備蓄がもう底をつきました。明日からの土曜日曜は上陸しての食糧補給をしたいと思います。許可をお願いします。」

「うむ、真田くんならやってくれるだろう。期待しているぞ。では今日はもう休んでくれ。」

ノリのいい親友に見送られて、俺は下宿への道を歩いていた。

「やっぱり遼クンだあ！よかったあ！」

そういつていきなり俺の腕にからみついてきたのは、40代半ばくらいの地味なオバサン・・・。

艦長なぜですか、ここは黒髪の美少女では？

オバサンにからまれてしまった俺の週末はどうなる？

一体このオバサンは何者？

12章ほどで終わる予定です。毎日21時更新予定に変更いたしました。。

がんばります。^^

# 1 「だからね、明日、もう今日だけど、一日だけつきあって?」 (前書き)

はじめまして、桐原草と申します。

初めての投稿です。よろしくお願いいたします。

# 1 「だからね、明日、もう今日だけど、一日だけつきあって？」

研究室に泊まり込みももう3日目。俺はカップラーメンをすすり、大輔はパソコンで三国志ゲームをやっていた。

俺はカップラーメンのひからびた具をよけながら、ぼそっと呟いた。

「もうすぐ日付が変わるな。明日はなんか面白いことするぞ。」

大輔はパソコンから顔を上げた。三日前から育成していた弱小領主がやっと国を広げたらしく、やけに満足そうな顔をしている。

「明日は美代ちゃんとでえとなのだ」

「また地元まで帰るのか。ご苦労さん。」

こいつは車で3時間の隣県まで、愛用スクーターで4時間以上かけて、隔週で里帰りしているのだ。

「卒業まであと2年かあ。」

「・・・こっちで就職しないのか？」

「わかつちゃいないね、俺様はお坊ちゃまなんだぞう、地元の名士の後継ぎとして期待されてんだ。その期待を裏切れまい！」

「いくら名士でも電車が1時間に1本だろ。たかがしれてら。こっちで大手企業に拾ってもらった方がお得ですぜ、お坊ちゃま。」

「・・・やっぱそうだよなあ・・・」

言いながら、人のいい顔でニヤリと笑って見せた大輔は、俺の大学での親友といえる男だ。（本人にはそんなこと口が裂けても言えないが）

いかにも育ちのいい田舎のお坊ちゃんなのだが、なぜか俺と気が合い、同じゼミということもあって、なんとなくいつもつるんでいる。

「俺はもう課題できたもんね」といいながら、帰ろうともせずにゲームしてるのは、俺につきあってるつもりなんだろなあ、このお坊ちゃんは。

俺は東京生まれの東京育ちだが、入った大学は実家とは反対側の東京の端っこだったので、大学入学と同時に家を出た。

もちろん一人暮らしは俺のわがままだから、家賃と生活費はアルバイトだし、学費は奨学金でまかなっている。生活はキツイが、もう4年もたつし、それなりに快適と言えるだろう。

特に今年から大学院生になって、2年かけてやってみたい課題も見えてきたところだ。

学生生活は順調だった。

俺が真田、大輔が沖田という名字だったことから、このゼミでは宇宙戦艦ヤマトごっこが流行っている。

「艦長、カップラーメンの備蓄がもう底をつきました。明日からの土曜日曜は上陸しての食糧補給をしたいと思います。許可をお願いします。」

「うむ、真田くんならやってくれるだろう。期待しているぞ。では今日はもう休んでくれ。」

泊まり込みも飽きたし、一度下宿に帰って、ゆっくり休もう。

久し振りにツーリングにでも行くか。桜はもう終わったけど林檎の花が綺麗な、あの道に行ってみようか。

なにせよ3日も研究室に泊まったから、風呂に入って、ゆっくり寝て、それからだな。

俺は自宅（といっても下宿屋の間だが）に向けて、夜道をとぼとぼ歩いていた。

――――

「あなた、遼クンでしょう？  
は？」

俺は自慢じゃないが、女に名前を呼ばれるような付き合いはしたことが・・・、いや、数えるほどしかない！

「やっぱり遼クンだあ！よかったあ！」

そういつていきなり俺の腕にからみついてきたのは、40代半ばくらいの地味なオバサン・・・。

その腕を払い除けなかったのを誰か誉めてくれ。

艦長なぜですか、ここは黒髪の美少女では？

と心で激しくツツコミながら、何気ない風を装う。

「どちらさまでですか？」

「やっぱり忘れちゃったのねえ・・・一緒にお風呂入ったことだつてあるのに・・・」

オバサンの声が微妙に大きくなった気がする。

「何を！・・・いや、取り敢えずここはだめです。そこの公園に行きましょう。」

こんな時間に、下宿のすぐ近くで、こんな大声で喋らないでくれ。心臓に悪い！

「遼クンのお部屋でもいいんだけどなあ」なんてほざいてるオバサンをつかんで、公園のベンチに座らせた。俺は立ったまま、にらみを利かすように言った。

「で、アナタはどちらさまでですか？」

「ちよっとその前に！！・・・今は何年かしら？」

は？

このオバサンは何を言ってるのでありますか、艦長？

「・・・1991年5月24日金曜日ですが？」

「うっふふう」

オバサンはタツプリ時間をかけて、にちゃあっと笑った。

「もう、夜中の12時すぎてるから25日土曜日ね。・・・りょうおクウン、会いたかったあ。」

・・・立ち直るのに1分くらいはかかってしまったが、俺はポーカーフェイスには自信がある。

「どちらさまでしょうか？」

「なんだ、面白くない。全然動揺してくれないのね。小学校のあだ名が、じいさんだっただけのことはあるわ。」

オバサンがこちらの反応を窺うように言う。

落ち着け、遼介、オバサンはわざとお前を動揺させようとしているぞ。

「どうしてご存じなのかはわかりませんが、よくお調べでいらっしやいますね。」

ちよっと嫌味だったか？初対面なのに。

「遼クンのことなら何でも知ってるわよ。半年続いた彼女は元気？もう別れちゃった？」

芙美子のことは大輔と、あと数人しか知らないはず。

何で知ってるんだ？！別れたことは大輔でさえ知らないが・・・。

「少しは驚いてもらえたようね。そうじゃなくっちゃ。少しは楽しませてもらわないと。さてと、これからが本題よ。遼クン、明日は



お暇でしょ、私とデートしてね。」

「はぁ？」

本心からの叫びが出てしまった。ナニってんだ、このオバサン？

「だからね、明日、もう今日だけど、一日だけつきあって？」

オバサンはにっこり微笑んだ。その顔は、芙美子が最後に見せた微笑みにどことなく似ていて、思わず唾を飲み込んだ。

## 2 「もっと他にも知ってるかもしれないわよ？」

言うこときいた方がいいと用

俺はまじまじとオバサンを見た。

公園の街灯に浮かび上がるのは、化粧っ気のない顔、薄茶色のズボンに焦げ茶の上着、足元はどうみてもつつかけ。ちよつとスーパーに買い物に行く主婦のような、俺の学生生活には全く接点のないオバサンそのものの姿。

なのに、他人のプライベートを、それも当事者しか知らないようなことを知ってるこのオバサンは、いったい何者なんだ？！

「うふふ。何者なんだ？みたいな顔してるわね。それじゃヒント。遼クンのご両親は九州出身でしょ。小さい頃行ったことあったんじゃない？」

確かにおやじやお袋は九州出身だ。けど、二人とも両親を早くに亡くして、東京に出てきてから知り合ったから、結婚してからとはほとんど帰ったことないはずだ。

「九州にはお前の小さい頃に帰ったきりだわね。もう一度くらいは帰ってみてもいいんだけどねえ」っていう話を遠い昔に聞いた記憶がある。

俺の様子を満足げに見ながら、オバサンが言った。

「あっちにもほんの少し親戚が残ってるのよ。私もその一人。私の名字は藤木っていうの。藤木って叔母さんの旧姓でしょ。遼クンが小さい頃、遊んであげたことだってあるのよ。それで遼クンのその後も叔母さんに時々聞いていたってわけ。思い出した？」

オバサンが俺の顔をのぞき込む。

いや全然思い出しません。けど、親戚だったのか。それなら小学校

のあだ名も知っててもおかしくない・・・のか？  
でも、どうして芙美子のことは？

「彼女のことまで知ってたのは？」

俺の声が少しかすれて、自分の声じゃないようだった。

「んー、それはちょっと、企業秘密？ ふふ、全然大丈夫よお。明日のデート後に詳しく教えてあげる。だからね、一緒に行こう？」

なんかカチンときて、思わず言ってしまった。

「その話し方、どうして語尾を上げるんですか？それから、デートなんてお断りです。」

それに「全然大丈夫」って何なんだよ。全然の後は否定語だろうが。小学校で習わなかったのかよ！

俺は心の中で悪態をつきまくった。

一方、オバサンは目に見えてうるたえていた。

「あー、コレ・・・うーん、ごめんね、ちょっと私の住んでる辺りで流行ってて・・・全然大丈夫も気になるよね・・・ごめん、デートの時は気をつけるよ。明日11時でいい？」

いや、そんなこと言ってんじゃない、きっぱり断っただろうが。何聞いてんだよ！

「明日は予定があります。明後日も。」

「そんなこと言わないで。お願い、明日だけで良いのよ？・・・あ、しまった、また語尾あげちゃった、ごめん。」

「いや、この場合はいいんじゃないですか？疑問形として・・・って、そんなこと言いたいんじゃないって！」

「あはは、明日の件は本当にお問い合わせ！　お願いします！」

私、ホラ、九州から出てきたばかりなのよ、だからこの辺全然わからないし、親戚の道案内だと思って。それが終わったらもう絶対、迷惑かけない。約束します。

それに明日が終わるときに、遼クンの不思議に思っていること、すべて答えるから。だから・・・」

「全然わからない」はきちんと言えたな、なんて関係ないこと思いつながら聞いていたら、いきなりオバサンが後ろを向いた。

ん？何だ？なんか泣いてるみたい？まさか？

はつきりいって、俺は明日つきあう気なんてさらさらなかった。

泊まり込みの課題が終わったばかりだし、芙美子と別れたばかりだし、むしゃくしゃするから久しぶりのツーリングに出掛けたかったんだ、心の底から。

なのに、なんでオバサンは知らないも同然の親戚に頼るんだよ、なに泣いてるんだよ、なんで芙美子のことまで知ってるんだよ。俺の中では「何故」がぐるぐる渦巻きを作っていた。

「もちろん、明日かかった費用はすべてお支払するわ。交通費に至るまですべて。私は親戚ですもんね、年上だし。こちらからお願いしたわけですから、そこは心配しないで。」

オバサンの口調が急にビジネスライクになった。こっちがオバサンの本性かもな。

「・・・それに、いくら親戚だって恋人のことまで知ってるなんておかしい、と思ってる？・・・もっと他にも知ってるかもしれないわよ？言うことときいた方がいいとおもうなあ。」

俺が黙っていると、オバサンは向こうを向いたまま、静かにボソツと呟いた。

なんだ、今度は脅迫か！ 泣いてたんじゃないのかよ！  
変わり身の早いオバサンだな！

「・・・終わったらきちんと説明してもらえますね？」  
俺は少しばかり面白くなってきていた。明日は予定がないといえ  
ばない。泣いていたのは演技か、違うのか。他人も同然の年下の男に  
案内を頼むのはなぜか。どこにつれていくつもりなのか。俺のこ  
とを色々調べているのはなぜか。どんな利益があるのか。俺のリス  
クはないのか。

オバサンはいきなり振り返った。  
その顔がパツと眩しいほど輝いているのを見て、何でそんなうれし  
そうな顔するのか、何がそんなにうれしいのか、わからなかった。  
胸の奥の方がチクンと疼いた。だから、気づかない振りをすること  
にした。オバサンの眼がほの暗い街灯の明かりを受けて、泣いたよ  
うに光っていることも・・・。

### 3 「・・・遼クン・・・起きて・・・」

「11時に待ってるからね」

うれしそうに繰り返すオバサンの声を背中に聞きながら、俺は部屋に帰ってきた。

やけに疲れた・・・。

ビールが一本だけ残ってた。

シャワーに濡れた髪を拭きながら、俺はぼんやり考える。

オバサンの目的はなんだろう。

なんで泣いてた？

俺に金がないのは見りゃわかるだろうし、単に東京のガイドがほし  
いだけ？

それだけであんな時間に待ち伏せ（やっぱりしてたんだろうな・・・  
）までするか、普通。

泣くほどツアコンしてほしかった？ そんなばかな。

それに親戚だったって一度会ったきりだろ。・・・わからん・・・。

名字は藤木だって聞いたけど、下の名前は聞いてない。

お袋の親戚みたいだし、明日の朝、電話かけて聞いてみるか。なん  
かわかるだろう。

芙美子のことも知っていたみたいだった・・・。別れたことも知っ  
ているんだろうか？

そんなこと調べてどうするんだ？どんな得があるんだ？

なにか理由があるんだ。俺を明日一日拘束する理由が。

そいつをさっさと見つけて、イニチアシブをとりたいなあ・・・。

――――

ドアのノックの音で目が覚めた。

「・・・遼クン・・・起きて・・・」

ためらいがちな声。

うわっ、まずい。

あのまま寝てしまったようだ。

「はい！　すぐいきます。」

「・・・よかったあ、通りで待ってるから、支度できたら来てね。

急がなくて良いから」

潜めた声でささやくように言った後、階段を降りていく音が遠ざかっていった。

お袋に電話できなかったな。  
俺は慌てて着替えを始めた。

――――

「ゆっくりでよかったのに。」

そう言ったのは昨日のオバサン・・・というか、いつもはこんな感じなんだろうな。

朱色のベレー帽をあみだにかぶって、さりげなくおしゃれた。薄い

緑のカーディガンが似合ってる。茶色のスカートと靴もなかなか。自分に似合う格好がわかってる感じた。

顔は美人ではないけれど、愛嬌のある顔……といえいいかな。丸顔で童顔だけど、それがかえって今日は30代くらいに見える。昨日は暗がりだったから老けて見えたのか？

「昨日は情けない格好だったもんね。これなら一緒に歩いてくれる？」

駅前のマックで俺はビッグマックにかぶりついていた。

そういえば俺は朝から鏡も見えないような……ちよつと申し訳ない気さえしてきた。

「……どこにいきたいんですか？」

「んー、あのね、まず確認ね。今日かかる費用は全部私が払う。誘ったのはこっちだし、年上だし、親戚だしね。それでいいよね？」このビックマックを買うときに揉めたのだ。

電車賃などは出してもらっても良いが、俺だけが食べるマックまで払わせるのはおかしいだろう。

しかし、彼女には払いたい思惑があるようだ。

なんだそれは？ 何を企んでいる？

俺が黙っていると、彼女はもう一度念を押した。

「決まりね、遼クン。文句は聞かないからね。」

俺が諦めて軽く頷くと、彼女はふわっと笑いながら付け足した。

「今日が終わるまで種明かししないし。諦めて、ね。」

口に付いたケチャップを拭いながら、俺も苦笑いするしかなかった。

「それじゃ、腹ごしらえもできたし、つきあって欲しいところがあるんだけど。」



と、連れてこられたのは、なんと百貨店だった。

#### 4 「コンセプトは英国紳士よお。」

百貨店なんて殆ど入ったことがない。

母親のお供で何度か入ったような記憶があるだけだ。

一人暮らししてからはトンとご無沙汰で。（艦長！ ご自慢の「まんが日本むかし話」のナレーションのモノマネをやってください！）

なんて、ふざけたことを考えながら歩いていたら、急にシャツを顔に押しつけられた。

「コレ、コレがいいと思う。御試着お願いします。」

って、誰に言ってるんだ？ 俺か？ 俺が着るのか？

「あの上にベストがいいんですけど、似合うようなのあります？」  
試着室のドアの向こうから、店員と話してる彼女の声が聞こえる。  
艦長、これは一体何のドッキリなんですか？

俺は結局、グレイのズボンと、チェックのシャツと、白いベスト、そして茶色の革靴まで買うことになった。もちろん彼女の支払いで。買ってもらう理由がないと、何度も何度も拒否をして、押し問答を続ける俺に、彼女は涙ぐみながらこう言ったのだ。

「だって、私の若作りにも限界があるじゃない。そっちからも歩み寄ってくれなくちゃ、デートにならない！」

—————

俺は、愛用の古ぼけたトレーナーと、膝がでてくたくたになったジーンズ、しばらく洗ってない年季の入ったズック靴の入った紙袋を

渡され、げんなりしていた。

「高かったんじゃないのか？」

店員を前にしての激しい押し問答の応酬の間に、何とか保っていた敬語も消えてしまった。

「ブランドものっていうわけじゃないし、安くて遼クンに似合いそうなもの、探すの得意なのよ。」

得意げに彼女が言う。

ん？なんか引かかったぞ。探すの得意？

言い掛けた俺の言葉は、彼女に遮られてしまった。

「でもなんか足りないのよねー、と思ってたんだけど、コレよ、コレ。これかぶってみて。」

ニンマリしながら彼女が差し出したのは、なんとハンチング帽。

「こんなのかぶれていうのか？！」

俺は自慢じゃないが、野球帽型の帽子しかかぶったことがない。

なんの拷問だ、これは！

こんな格好して歩いてるところを誰かに見られたら・・・。

「遼クンはコレが似合うのよ。あたしに任せなさい。ホラホラ、鏡見て。」

やけにきっぱり言い切る彼女はいったい何がしたいのだろうか・・・。

・・・確かに似合っている。今までは目を反らせていたが、洋服もそれなりに似合っている。

「ふふーん、いいでしょう？コンセプトは英国紳士よお。ニツカボツカ、買っちゃおう？」

・・・もう、どうにでもしてください・・・。

――――

百貨店を出て通りを歩いているとき、俺の腕に手を絡ませながら、彼女が言った。

「これでちよつとは似合いのカップルに見えるようになったかな？」

本気かオバサン？ いったい何を考えてるんだ？！

心の中で突っ込んだ時、すかさず彼女がこう言った。

「今、遼クン、本気かオバサンって、考えたでしょう！？」

艦長、わかりました、コイツは妖怪サトリです！

「ペナルティー！今から私のこと、祐子って呼ぶこと！」

「はぁぁぁあ？！」

俺は鼻から息を吹き出した。

エクトプラズムも出たかもしれん・・・。

「嫌ならユウチャンでもいいけどお？」

オバサンなんて呼ばせないもん、とブツブツ言っている。

「・・・祐子さん・・・」

俺は必死に声を絞り出す。血液が逆流しそうだ。

「だめー、祐子ちゃんって呼んでみて？」

「・・・祐子・・・」

「ふふーん、ヨクデキマシタ。」

俺は彼女の顔を見ることができなかった。

## 5 「それから、心の中でも祐子って呼んでよ？」

駅前のコインロッカーに俺の愛用衣料の入った紙袋を入れて、俺たちは電車に乗り込んだ。

今や気分は矢沢永吉だ、マイクでもタオルでも振り回せそうだった。だめだ、こんなことでは。すっかり彼女に主導権をとられてしまっている。冷静にならなくては。いつもの俺を取り戻すんだ。

「ところでどこに？」

この女、東京初めての割には迷いが無いよな。

「神田の古本屋街。」

即答したな？

「こんな格好で、行くのは古本屋街？」

「うん。おいしい焼き林檎を出してくれるカレー屋さんがあるのよね？ お腹空いたでしょ、お昼にしましょうよ。」

確かに焼き林檎を出してくれるカレー屋はある。

俺も一度行ったことがある。おいしかった。俺は林檎が大好きなんだ。

でも、どうしてこの女が知っているんだ？

「その後はどうする？」

「んー、ぶらぶら冷やかしながら見て回りましょうよ。お勧めのお店教えてね。」

「アンタ、俺が神田に詳しいってどうして知ってるんだ？それに東京は初めてじゃなかったのか？やけに詳しいじゃないか。」

「アンタじゃなくて、祐子よ。呼んでみて？」

「・・・」

はぐらかしたな。

警戒レベルがイエローゾーンに突入したのを感じながら、俺はだまり込みを決め込んだ。

――――

「焼き林檎屋さん、どこにあるの？」

「アンタが知ってるんじゃないのか？」

艦長、焼き林檎屋さんじゃなくてカレー屋です。焼き林檎は食後のデザートです。

「アンタじゃなくて祐子よ。今度アンタって呼んだらペナルティね。それから私、お店があることは知ってるけど、場所は知らないわよ。アタシ方向音痴だもん。連れてってくれるのは遼クンのお仕事デス。」

平常心を取り戻すのにしばらく間が空いた。

「・・・カレー屋には連れていけるが。」

「さっすが遼クン！さ、早く行きましょう。お腹空いちゃった。」  
そう言って微笑む女の顔を何故か見られず、目を反らしてしまった。

何で俺はこの女の言うことをきいているんだろう。

洋服を買ってもらったからか？

もともと欲しくも何ともなかった洋服だけど。

親戚で年上だからか？

顔も知らない他人同然の付き合いしかなかったけど。

親友でも知らないような俺のことを知っていたからか？

確かに気味は悪い、謎解きをしておかなくてはと思っている。

でもどうして俺は今ここにいる？

気味が悪いような女につきあって？

面白がっていたはずなのに、俺の心のなかに他の理由があるようで、なぜか深く突っ込んで考えるのが怖かった。

――――

「おいしーい！」

そう言って本当に美味しそうに食べるくせに、皿の中のカレーはいっこうに減らなかった。

「前に来たときは定休日だったのよね。だから食べるの初めて。ほんっと美味しい！」

遼クンは何回くらい来たの？ 彼女と来たの？ そのときは焼き林檎食べた？ 彼女とどんな話するの？

マシンガントークの女を無視して、俺は黙々と食べ続けた。

気がついたら静かになっていたので、テーブルから顔をあげると、ぼおっと俺を見つめているのと目があった。

気まずさから声をかける。

「食べないのか？」

「うん・・・しゃべりすぎて疲れたみたい。」

俺は呆れて、俺たち兄弟が食卓で親父から毎日のように聞かされた言葉を言う。

「食事の最中は静かにして、食事を楽しむものだ。」

それを聞いた途端、彼女は目を真ん丸にして、それからいきなり笑いだした。

「それっ、・・・ひさ、ひさしぶりに・・・聞いたあ。・・・うけるう・・・」

なんと涙まで流して笑い続けている。親父の口癖を久しぶり？

「なにがお嬢様の琴線に触れたんだ？ アンタのことはさっぱりわからない。」

彼女は感情の読めない顔をしてしばらく固まっていた。

それからおもむろに

「アンタっていわないで。ペナルティだね？ これ貸しにしとくからね。後で返してもらうから覚悟しといてね。

それから、心の中でも祐子って呼んでよ？ どうせ遼クンのことだから、オバサンとか女とか、ひどい言葉で呼んでるんでしょう。お見通しなんだからね。

はい、それじゃもう一度祐子って呼んでみて？」  
とまくしたてた。

またなにかごまかしたな、とか、凶星だよオバサン、とか心でつぶやきながら口を出たのは

「なら、語尾をあげるのも次からペナルティだ。」  
という言葉だけだった。



## 6 「それに将来役に立つわよ。彼女に素敵な指輪贈るときに。」

「焼き林檎おいしかったあ。もう2時になっちゃったね。急ごう。戦争ものの本がいっぱいあると良いな。」

艦長、どうして彼女は、俺が戦争ものを好きだって知っているのでしょうか！

そして、俺たちは軍関係の本を集めている店に着いた。戦艦三笠や大和のポスター、駆逐艦の変遷を書いた本。

俺は興奮していることを気づかれないようにしながら、チラチラ店内を物色していた。

はっと気づくと、彼女が聖母マリア様のような微笑みで俺を眺めている。

「遼クン好きだねえ、こういうの。」

「悪いか?!」

「ううん、可愛い。」

艦長！　こういうときはどうしたらいいのでありましようかつ?!

—————

趣味を堪能して、満足感100%の余裕をみせて、俺は聞いた。

「これからどうするんだ？」

「うふふ。お買い物につきあって欲しいんだけど。」

「また?!」

「だって遼クンに選んで欲しいんだもん。」

ということで連れてこられたのは、隣の駅のジュエリーショップ。

「こんなところで俺が役に立つ訳ないだろうが！」

一度も足を踏み入れたことすらない、宝石を見ると原価はタダの石なのに、と考えてしまうような俺にはこんな所場違いだ、と訴えたのだが、あの女は聞く耳を持たなかった。

あらあ、その考え方は改めた方がいいわよ、女の子にとっては、指輪を彼氏に選んでもらって贈ってもらうのは夢なんだから、とかえってお説教される始末。

こんな場所にジュエリーショップがあること、よく知ってたな。

「一度入ってみたかったのよ。いつも前を素通りするだけだったから。」

いいじゃない、私がお金出すんだから。

それに将来役に立つわよ。彼女に素敵な指輪贈るときに。」

そう言って、腕を取られて、店内に連れ込まれてしまった。

だめだ、もしかして遊ばれている？

—————

「アンタ、結婚しているのか？」

左手の薬指に指輪がはまっていたから。いくら俺でも、その指輪の意味くらいは知っている。

「うふふ、気がついた？ 結婚しているのです。だから安心して？ 襲われる心配はないわよ、遼クン。」

彼女は左手をひらひらさせた。

「なら、ソレ、俺が選ぶ必要なかったじゃないか。そいつに買ってもらえばいいだろ。」

指輪の小さな紙袋を見ながら言った。俺を連れてきた意味は何だ？

「んー、言い出せなかった、ってところかな。あ、結婚はしてるよ、誤解しないでね。」

あまり旦那と仲がよくないとか？ま、俺の気にするところじゃないな。関係ない、関係ない。

なんとか彼女のことを締め出そうとしてやっきになっている自分に気づいて、なんとなく不愉快だった。

ゆっくりお散歩しながら駅まで戻ろう、という提案に従って夕闇が迫ってきた商店街を歩いていく。

「東京は初めてって言ってたけど、嘘だろう？ さっきの店の前素通りするだけ、って言ってたもんな。

それにカレー屋は俺の穴場なんだ。あまりガイドブックには載っていない。」

「・・・そうだね、何度かきたことあるよ。遼クンとここに来たかったから、嘘ついちゃった。

でも、方向音痴だからガイドがいるっていうのも本当。あの本屋の角を曲がったところが駅、っていうのはわかるけど、北とか南とかいわれたら全くわかんない。」

それはそんなに自信満々にいうようなことか？

艦長！ この女を何とかしてください。

「ちょっとだけ本屋さん、見ていこう。」

店先のファッション雑誌を興味深そうにめくっている。「こんなのが流行なんだあ」

俺も店内に入らず、マンガ雑誌をパラパラ見ていた。

もういい、というので駅に向かった。

「釣りバカ日誌っていうマンガ知ってるか？ アレに出てくるスーさんっていう上司が、俺らのゼミの教授に似ていて・・・」  
さっきみたマンガを思い出して、世間話のつもりだったのに、彼女は俺を遮った。

「止めて、その名前呼ぶの！」

ん？

釣りバカ？ スーさん？

「・・・ゴメンね、大きな声出して。」

「スーさんがいやなのか？」

彼女が頷くだけだったので、俺もそれ以上突っ込まなかった。しかし、何か引つかかるものを感じていた。

## 7 「駅前のホテルでディナー、夜景の見えるホテルでディナー。」

「駅前のホテルでディナー、夜景の見えるホテルでディナー。」  
さつきから彼女は上機嫌に繰り返している。

彼女の旦那はあまりこういうところに連れてこなかったのか？

「なにいつてるの。来たことないのは今の遼クンでしょう。私はいつぱい連れてきてもらったわよ。すごく優しいんだから。」

何故俺はここでノロケを聞かなくてはいけないんだろうか。艦長、教えてください。

「でもねえ、遠距離恋愛を10年も続けたのよ。」  
そいつは凄い。

「だからふつうに会社帰りのデートっていうのにあこがれてたなあ。会社の帰りに待ち合わせて、っていうの一度もなかったもんね。」  
そんなもんですかね。一介の学生にはわかりません。

「ふふふ、遼クンは相変わらずね。・・・ま、いいか、お願い事、何もかも叶ってしまったら却って面白くないかもね。さ、行こう。」  
もう俺は彼女に腕を組まれるのにも慣れてしまった。

初めて入った高そうなホテルだった。絨毯がふかふかして歩きにくいこと、この上ない。

「何か負け惜しみ考えてるでしょ、うふふ。」  
艦長、やっぱりこの女は妖怪サトリです。

駅前ホテルでディナー、はさすがにおいしかった。  
フォークは外側から使っていけばいいのよねえ、なんて彼女がつぶやいてくれたから、マナーにまごつくこともなかった。

肉料理の皿が下がり、後はデザートだけとなったとき、彼女がおもむろに切り出した。

「ねえ、さっきの指輪はめてくれない？」  
紙袋を差し出される。

ソレはさすがにまずいでしょう。

「これが最後のお願い。ね？」

ビクターの犬のようにこちらを見ている。

「これが終わったら種明かしするから・・・」

「・・・本当だな・・・？」

艦長、降参です・・・。

「きちんと祐子って呼んでね。」

—————

レストラン中が俺に注目しているような、そんな錯覚をおぼえた。  
非常に居心地の悪い時間だった。もう二度とこんなことはごめんだ。

その元凶はニコニコしながら、左手を本当にうれしそうに眺めている。  
アイスクリームがとろけそうだ。

そんなにうれしいもんかね、と心で毒を吐きながら、俺はデザート  
を平らげた。

「うれしいわよ、やっと、彼氏を選んでくれた指輪をはめてもらえたんだもん。」

「ハイハイ、それじゃ、種明かしといこうぜ。ここでもいいのか？」

「相変わらずムードないなあ。まって、食べ終わるから。」

苦笑いしながら、嫌味のように彼女はゆっくりゆっくりスプーンを口に運んでいた。

8 「大丈夫よ、襲ったりしないわよ。そっちはどうかわからないけどね。」

「このホテルの上に部屋をとってあるのよ。そこに行きましょう。」  
「って、おい、俺は変なことになるつもりは全くない！」

「あれえ、変なこと考えてるう？ 大丈夫よ、襲ったりしないわよ。そっちはどうかわからないけどね。」  
艦長、こんなところで俺の理性を試さないでください！

「さ、行きましょう。種明かしするんでしょう？」  
そう言って彼女はすたすたあるいていく。  
俺はついていくしかなかった。

—————

「さあ、来たぞ。早くしゃべってくれ。」  
今日は調子が狂いっぱなしだった。さっさと帰りたい。  
ふかふかのクッションに沈みこみながら、俺は部屋の煎餅布団に焦がれていた。

「せっかちねえ。・・・ねえ、遼クンはどんな風に思ってるの？  
推理してるんでしょ、遼クンのことだから。聞かせてよ。」  
彼女は相変わらずの余裕を見せながら、指を組み合わせた。

「・・・アンタ、親戚なんて嘘だろう？」

「そうね、本当は親戚じゃないわ。」  
悪びれもせず、彼女は認めた。

俺は、今日一日考えていたことを話し始めた。



「考えたんだ、親戚じゃないにしても、俺のことに詳しすぎる。あの程度は近い存在に違いない。」

それにさっき、親父の口癖にうけていただろう。」

「・・・だとしたら、どうなのかしら？」

薄ら笑いとも見える表情で、彼女は聞き返す。

覚えてろ、吠え面かかせてやる。

「アンタ、親父の愛人だろう。」

彼女はたっぷり一分は固まっていた。

それから、口許がほどけていったかと思うと、いきなり笑いだした。

「そ、それって・・・うけるう。・・・それは思いつかなかったわ

あ・・・」

なんだ、違ったのか。

家庭内争議の危険性まで考えていたので、ちょっと安心。バカにされたような気になってちよっと悔しいが。

だとしたら、この女は一体何者なんだ。

親戚じゃなくて、俺のことに詳しい、前の彼女の芙美子のことを知っていた。

小学校のあだ名や、親父の口癖、お袋の旧姓まで知っている、この女は誰なんだ？

「うふふ、今日、遼クン誕生日でしょう？ お誕生日おめでとう。」

「・・・お前は誰だ？」

彼女はにっこり微笑んだ。

## 9 長くなるわよ、と前置きしてから彼女は話し始めた。

長くなるわよ、と前置きしてから彼女は話し始めた。

「彼氏がいるって言ったでしょう、入社して1年目の研修の時に知り合ったの。」

「ウチの会社は1年間、いろんな支店のいろんな部署を回って研修するのよ。」

「彼とは大阪に来た時に知り合ったの。」

「九州に住んでいるというのも嘘だったんだな、長くなりそうな告白を聞きながら、俺はそう思った。」

「本配属は彼が東京、私が大阪。」

「そうなるからお互いなんとなく気が合うかも、と思い出して、ときどき遊びに行ったりするようになったの。」

「でも、東京と大阪でしょ、会うのは一ヶ月に一回くらいよね。それに正式に申し込んだり、告白したりってこともなかったから、つきあってるのかつきあってないのか、よくわからなかったわ。」

「もちろんプラトニックよ。キスしたりくらいはあったかもね。うふふ。」

「それで10年。アンタらすごいなあ、信じられない。」  
「思わず声に出してしまった。」

「ふふ、遼クンがそんなこと言うなんて。」

彼女は本当に楽しそうに笑った。

――ま、私の両親があまり乗り気じゃなかったのもあるしね。あの  
人たちにとっては、東京は遠いから。

お嬢さんだったしね、といって彼女は微笑んだ。

――私の配属は総務で、東京と連絡を取ることも多かったの。そんな  
ときは研修中に仲良くなった、同期の総務の女性に連絡してた。  
彼女は私と彼が仲が良いことも知ってて、彼とも時々しゃべったり  
してるみたいだった。

――その総務の同期が教えてくれたの。私たちが入社して4年目く  
らいかな。

技術課にスターシャみたいな、スッゴい美人が入社したわよって。

遼クンなら知ってるでしょ、宇宙戦艦ヤマトに出てくる美人さんよ。

――その美人は鈴木っていう名前で、実は私と同じ。藤木も嘘だっ  
たの、ごめんね。

それで、みんなからスウちゃんって呼ばれてるんだって。それも私  
と同じ。

鈴木なんてありふれた名前だから、愛称もそうなるのよね。

釣りバカ日誌のスウさんもな、声に出さずに俺は応える。

――私の彼は初めてヤマトを観たときからスターシャのファン。声  
も顔も大好きなんだって。

遼クンみたいね、彼女はふふと笑った。

なぜそんなことを知っている、と俺ももうお決まりとなったリアク  
ションを返す。

――スターシャみたいなスウちゃんのこと、今から思えばそのとき

に聞いておけばよかったのかも。  
そうすればこんなに引っぱらずにすんだかもね。

――他人に聞かれれば私たち付き合ってますと答える、けれど月に1回くらいは会う、会えばとても気があって楽しくて。そんな関係を9年続けてもう31歳になったの。

――ウチの両親が怒り出しちゃって。

彼女は少し疲れたように言った。

本当は私も少し疲れちゃってたのかも。

ささやくように彼女が言った。

――相手に会わせなさい、ご両親にもご連絡しなさい、って。

そこからはトントン拍子に進んだわ。

結婚式まで一直線よ。

――でもね、

彼女は打ち明け話をするみたいに声を潜めた。

あの人と私の気持ちについていかなかったみたいなの。

ううん、私の気持ちだけかもね。

――スターシャのスウちゃんのこと、結婚してから聞けなかったの。バカでしょ。

なぜか彼女が急に小さく見えた。

## 10 「それでね、気づいたら遼クンの下宿の前だったのよ。」

「でも結婚して幸せだったんだろ？」

俺は彼女のうつむいた首筋を見ながら言った。

「もちろん。彼はいろんな所へ連れていってくれた。

毎日忙しくて、夜も遅いし、出張も多いけど、お休みはできるだけやすんで一緒にいてくれた。」

古本屋街もよく行ったわよ、と彼女はいたずらっぽく笑った。

イイ男でしょ、とも。

――でも、オンナノコの気持ちに疎いところは減点よね。

この結婚指輪だって、私一人で買いに行ったのよ。

お揃いで買ったのに彼はつけてくれなかったし。

恥ずかしいんだって。

なんだか俺は自分のことを言われているような気になって、すみませんと謝りそうだった。

――プロポーズの言葉もなかったし。

まあ、こっちが押しきって結婚してもらったようなものだから、仕方ないんだけどね。

――一番悲しかったのは、結婚しても私のことをスウちゃん、って呼ぶこと。

もう名字も変わってるのに。鈴木じゃないのにね。

それだけはやめてたっていても、かわいいし気に入ってるんだよ、って笑っておしまい。

「それでどうなったんだ？」

なぜか黙っていられなくて、俺は聞いた。

「ん。幸せな結婚生活が続いたわよ、5月24日までね。」

「昨日？なにがあったんだ？昨日に。」

「うーん、正確には2011年5月24日ね。

事故に遭ったのよ。

もうすぐ死ぬと思う。」

なにも言えないでいる俺を尻目に、彼女は淡々と続けた。

「彼の誕生日が5月25日だね。でも彼は2週間の出張中。

ま、よくあることよ。

そんなことじゃへこたれません。

ただ、夜中の日付が変わるときに、急にケーキが食べたくなくてね。コンビニに買いに行ったのよ。」

こっちでも、コンビニ増えてきてるみたいね。2011年には街に3つも4つもあるわよ。そういつて彼女はクスリと笑った。

「信号のない商店街の道路でひき逃げされちゃった。

ついてないわよね。

300円ほどのケーキが食べたかったおかげで、死んじゃうなんて。」

正確にはまだ死んでないんだけどね、と彼女はペロリと舌を出した。

「それで？」

俺は自分の声が、どこか遠くから聞こえているような気がした。

「それでね、気づいたら遼クンの下宿の前だったのよ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1840ba/>

---

だから、待ってるから

2012年1月12日21時53分発行